

2019年度

東日本大震災ボランティアツアーin 福島  
報告書

2019年度  
東日本大震災ボランティアツアーin 福島

**1 目的**

- (1) ボランティア活動を通じて、被災地の復興に寄与する
- (2) 被災地の現状を知ることにより、今後どのような支援が必要なのか、自分たちにできることは何かを考え、企画実行する
- (3) 災害時にどう避難し、当面の危機を回避するか、復興をどのように進めるかなど、被災地の人びとの経験から学び、今後災害が起きた際に活躍できる人材を育成する
- (4) 被災地の方より防災、減災の大切さを学び、防災意識を高め、地域防災力の向上に貢献する

**2 日程**

令和元年9月13日（金）～16（月） 3泊4日

**3 活動場所**

福島県いわき市、双葉郡広野町、南相馬市

**4 活動内容**

- (1) 津波、原発事故による被災現場の視察
- (2) 復興イベントへの参加
- (3) NPO 法人でのボランティア
- (4) 震災の体験者・復興に向けて活躍している方・支援者の講話
- (5) 民泊等地元の方との交流

**5 参加者**

37名（品川キャンパス17名 熊谷キャンパス20名）

**6 宿泊場所**

・広野町二ツ沼総合公園合宿の宿      ・農家民宿（南相馬市）6ヶ所

**7 協力機関**

- (1) 観陽亭 遠藤義之氏
- (2) NPO 法人広野わいわいプロジェクト
- (3) the people



## 9 報告・感想

### (1) NPO 法人 the people 講演・ボランティア活動

東日本大震災以降本学のボランティアの受け入れでお世話になっているいわき市で活動している NPO 法人 thepeople。講演では団体の設立の趣旨や東日本大震災からの活動、なぜ古着のリサイクルをしているのか等話して頂いた。講演後は古着の仕分け作業を行った。

#### 【感想】

古着を集めてリユースすることが災害の支援につながるということがわかりました。災害は急におこるものです。その急に備えられるよう準備することが大切だと思いました。古着の仕分けではまだ着られる服やタグがついた新品が多いことに驚きました。使えるものは使って、ムダを無くすことが環境のためになると思いました。



私は古着のリサイクルについて興味を持ちました。実際に自分の目で倉庫にあった古着の量を見た時は衝撃を受けました。さらにもっとびっくりしたのはその古着は、まだまだ着られるものばかりで再利用できるものが多くあったということです。捨てずに再利用し、地球にも優しくそれをするによってお金を得られるのはすごいと思いました。

古着のお話しがとても印象に残りました。震災後、復興のために行動を起こし、活動しているというお話しはよく聞いていましたが、前々から活動していた事が震災時に役立ったというお話しは意外と意識して聞いたことがなく新鮮でした。

表面的ではなく、立体的に被災地の現状を知ることが出来ました。特にコットン畑の重要性がわかりました。単純に復興の収入にしているだけでなく、人々の繋がり場になっていると思いました。また、古着の仕分けなど、直接的な復興作業でなくとも、被災地の人の助けになることがあることを知りました。

講演して頂いた吉田さんの話に元気、活力があって、情熱を強く感じた。感動したのは被害のあった農地を諦めずコットンに転作をしたところだ。普通の人なら放棄してしまうであろうところを放射線の影響を受けにくいコットンにして、それを福島県の産業として形成していく姿勢は見習うべきものがありました。

団体の理念である「元気なまちには元気な主張を続け、元気に行動する市民がいる」という言葉に強い感銘を受けました。古着回収&再利用活動から災害支援という活動まで輪が広がり、自分の小さな市民参加がやがて大きな力になるのだということを改めて強く感じました。今自分にできることは何かを考え、今回のボランティア活動においても積極的に活動し、未来に繋げていきたいと思えます。

## (2) 広野町旧幼稚園の除草作業 (受け入れ NPO 法人広野わいわいプロジェクト)

原発事故の影響で人口が少なくなってしまう廃園になってしまった幼稚園。この幼稚園の卒園生である高校生の「通っていた幼稚園が雑草だらけになってしまって悲しい」という声を聞いたNPO 法人広野わいわいプロジェクトの方より協力して欲しいという依頼があり、今回の活動となった。除草をし、きれいになった幼稚園では将来的に復興の拠点となるような居場所づくりをしていきたいとのことであった。

また当日は卒園生で子どもも震災当時この幼稚園に通っていたという方から幼稚園に対する思いや広野町の現状を話して頂き、この活動がどのような意味を持つのかを一層感じることができたと思われる。



広野町長のご挨拶



### 【感想】

幼稚園の中の掃除をして、ほこりが沢山出てきたため、何か月も人の手がくわえられてないことがわかりました。小さなテーブルや椅子、絵などを見て園児がここで生活していたのだと実感しました。また、お話しを聞いて歴史を持ち、地域の繋がりなどによって幼稚園がアートによって蘇ることを楽しみに思いました。

思い入れのある場所が無くなるのはとても悲しいことだと思いました。しかし、その跡地を何か形に残る用にしようという気持ちが伝わりこの町を愛しているのだなと思いました。

「復興」の1つのあり方を再発見することができました。たくさんの人の思い出の場所である幼稚園を再活用しようという取り組みに感動しました。また卒業できなかった園児の話聞いて震災の恐ろしさがよみがえりました。今回の活動で新たなシンボルとなる幼稚園の一端を担うことが出来、非常に嬉しく思います。

沢山の方々のお話しを聞いて、どの方も人との繋がりが大切だとお話しされていました。人と人が助け合って知識を出し合うことで解決できる問題が沢山あることがわかりました。

幼稚園の作業を通して広野町の現状や過去を知り、人と人の繋がり、そしてその力の偉大さを知れました。小さな幼稚園のボランティアと最初は思っていたのですが、全国の人々が関わっていることにも驚きました。

磯部さんをはじめ、広野町の方のあたたかさに触れ、この町が好きになりました。幼稚園のこの除草作業の発端が高校生の行動と聞いて驚きました。お会いできず残念でしたが、その行動力を見習いたいと思いました。また、利用されなくなった幼稚園をアートの展示場所にして再利用する粘り強さ、諦めない心が見られ、皆さん強い人だと感じました。

沢山の人々が携わっていて、町を少しでも明るくという思いが伝わってきました。県外の人がこの地に来て頑張っている姿はとても考えさせられました。また、関わった人が皆明るく、希望を持っているような感じがしたのが印象的でした。

### (3) 富岡町視察

帰宅困難区域に自宅のある遠藤義之氏に榎葉町、富岡町を案内して頂いた。未だ帰宅困難区域の残る富岡町では建物などのハード面では復興が進んでいるが、人があまり戻って来ておらず、人気のない街に学生は衝撃を受けていた。また道路1本隔てて住んでよい地域と住めない地域が分断されている地を自分の目で見た学生は様々なことを感じ取ったと思われる。

榎葉町では元原発作業員の方が退職後この町の復興ためにと始めた田んぼアートを見学した。町外から来た方の支援活動への情熱に触れ、刺激になったのではないかと思われる。また、この田んぼアートの理事の1人が本学経済学部の卒業生であった。



榎葉町田んぼアート



帰還困難区域との境目



インフォメーションセンター

### 【感想】

災害時の様子など体験をした当事者の方にしか知ることのない話を聞くことができました。一見、普通の街のように見えたが、お話を聞いて何があったのか、災害時に人々は何をしてどうなったのかを知ることができました。『生きなければ何もできない』という言葉が記憶に深く残っています。

富岡町に来たときの第一印象はいわき市や榎葉町に比べて全く人がいないイメージでした。私たち以外の歩いている人はほぼいなくて町全体の元気がありませんでした。8年経った今でも復興が全然進んでいない印象を受けました。また柵一つで家と家の行ける所と

行けない所が決まってしまうのが行けない区域に住んでいる人からするととても悔しい気持ちだと思います。

人が立ち入れない区域を見るのは初めてでした。すごく衝撃的でした。まるでゲームや映画のシーンのように見えました。しかし、自分の目でしっかり見たことによって、よりリアルに感じ、遠い話ではないことを実感しました。今までの自分に後悔しました。

帰還困難区域近くの雰囲気は日本にこんな所があるのかと思わされるような感じで衝撃的でした。そんな中でも作業をしている人や遠藤さんのように語り継いでいく人の存在は大切だと思いました。「人間1人では生きていけない」とのことだったが本当にそう思いました。

写真で見たことのあるような「被災地」を目の当たりにしました。割られていたガラスや生えたままの雑草、撤去する重機を生で見たときにはまだまだ震災の傷跡は残っていると思いました。3.11 当時の避難の状況の話も緊迫したものを感じました。ニュースやネットで得た情報とは質が異なると思いました。

田んぼアートはとてもキレイで市川さんの熱意を感じました。帰宅困難区域の視察ではテレビでしか見ていなかった風景だったので、実際に見て現実を見させられた感じがしました。実際に見たことで感じた被害だったなと思います。今日学んだことを忘れずに今後の人生を歩んでいこうと思いました。

田んぼアートをしている市川さんに心を打たれました。他県から来たというのに色々なボランティアに参加し、福島県に貢献している姿はカッコいいです。私はボランティアに結構参加しているのですが、まだまだです。市川さんのように色々なことに挑戦したいです。

#### (4) 広野町主催イベント『広野スタイル』で防災ブース出展

広野町主催のイベントで子ども向けに楽しく遊びながら学べる防災ブースを出展した。ツアーの企画メンバーが防災プロジェクトの研修（NPO 法人プラスアーツ主催）に参加し、準備をしてきた。当日は沢山の子供も達が参加し、学生自身も防災について学べたと思われる。





毛布で担架タイムトライアル



バケツリレー



防災グッズ暗記クイズ



防災グッズ釣り

### 【感想】

広野町はあまり人がいないイメージでしたが、広野スタイルのイベントには沢山の人が参加していて少し安心しました。イベントを通して、広野町の人たちと心から繋がれた気がしました。被災した地域を少しでも元気づけられたら良いなと思っていたので、そのようなことができて、とても嬉しかったし、やりがいがありました。

昨年よりも子どもたちも多く来訪しており、盛り上がっていたように思います。復興のため、町を活気づけようとする現場に立ち合うことが出来てよかったです。

小さい子から高齢者の方まで幅広い年齢層の方々と関わることができて良かったです。コミュニケーション能力がまだまだだと痛感する場面も多くあったので、もっともっと経験を積んでいきたいと思いました。

「防災」というテーマを広めるべく工夫して子ども達や保護者の方に伝えることができ、良い経験ができました。今回も広野町の方のあたたかさに触れることができました。また、仕事を通して先輩や友達などと会話をすることができました。また、この活動を通して自分でも防災について学ぶことができました。

子どもの笑顔が本当にキラキラしていて、関わっているととても幸せな気分になることができました。広野町の人達に元気になって欲しいと強く思いました。

広野町の子どもたちや大人の方々と交流ができて、公園が賑わっているのを見てこれが復興なのかなとも思いつつその陰にある帰還困難区域の方々のことを思うとたまに切なくなりました。

今回、子どもたちが予想以上に防災に興味を持ってくれてやりがいがありました。次回もブースを開ける機会があればゲームを自分たちで1から考案して子ども達に提供したいです。



#### (5) 民泊、民泊先で藍染体験

地元の方と触れ合い、生の声を聞くため毎年民泊を取り入れている。できるだけ交流を持てるよう2日目には各民泊先で藍染体験を行った。



#### 【民泊感想】

民泊の方から災害についての話も聞き、人の繋がりにより周りで助け合うことが大切だとわかりました。互いに嬉しい気持ちになれるような関係が望ましいのだと思います。(翠の里)

民宿の方々は玄関に入った時から笑顔で出迎えてくれてとても嬉しかったです。さらに被災した人の本音をきくことができました。本当に被災した人が感じていることや考えていることはメディアを通してでも伝わらないことが多いのだなと感じました。当事者に聞く大切さを学びました。(ゆず)

とてもあたたかく向かえいれてくださいました。手料理の晩御飯は身に染みるほどおいしいと思いました。宿泊場所もとてもキレイでした。何より民泊先の方のお話しも真剣に聞くことができました。実際の避難のことなど、記憶に残る話も聞けました。また泊まりたいと思いました。(森のふるさと)

震災当時の避難のお話しやその時の思いなどを聞く事ができ、本当に行ってよかったと思いました。宿の方は他から移住してきた方で、周りに親族などはいない状況で震災に遭い、親族を亡くされている方とは違う目線での考えなどはとても興味深かったです。(翠の里)

当時の被災された状況だったり、避難場所に避難してどういうものを支給されたのか、避難して一番嬉しかったことなど貴重な話を沢山聞けて、考えたことは自分だったらと照らし合わせて話を聞き、こんな考え方があるのだという常に感心しながら勉強することができました(森林)

民宿先の方との会話や野菜を使った料理がとても美味しく、とても満足です。話の中に出てきた助け合いのことを聞いて、人と人とのつながりの素晴らしさを再確認しました。(塔前の家)

#### 【体験活動感想】

藍染めを初めて行っただけだったので、葉を枝から取り、ちぎって色を付けることを知り、驚きました。満足のいくものが作れて思い出に残りました。

藍染をさせて頂いて、そのような伝統的な文化があることを知りました。その文化を地域の強みに変えて復興に繋がれば良いなと思いました。

藍染体験は初めてでした。取って来て頂いた藍の葉をちぎり、洗って、細かくすり潰し、キレイに染めることが出来ました。思った以上に美しい色だと思いました。日本の伝統の一部を味わう貴重な体験になりました。

世界に一つしかない素敵な模様を作ることが出来、とても良い体験ができました。また、民泊先では、津波がきた時どこでどうしていたのか、津波はどんな感じだったのか、どのように逃げたのか実際に車に乗って教えて頂き、想像以上にすごかったのだと知りました。

藍染をさせて頂き、世界に一つだけの自分の作品が出来ました。普段の生活では体験することのない貴重な体験を経験でき、大変ありがたかったです。

藍染の体験を行い、南相馬でどのように広まっているのかや染める時に化学薬品を使ったときと、塩を使ったときとでどう変わるかを解説してくれたのでわかりやすかったです。

藍染を体験させて頂き、自分らしさが出たものを作ることができました。一から物を作る体験を大学生になってからしてなかったもので、とても貴重な時間を頂きました。

藍染は初めての経験で、とても楽しくできました。戦争時に藍染の存続の危機があったなど、面白いお話も沢山聞けました。

普段体験することができない伝統工芸の藍染を体験してみて、楽しく思い出に残る工芸を作ることが出来ました。このような伝統工芸を復興に役立てられると良いと思いました。

藍染は初めての経験でした。空気酸化をしている時、黄緑から鮮やかな青へと変化する過程は感動しました。とても優しさを感じる色で、あのハンカチを使う度にお母さんのことを思い出すとします。

## (6) 一般財団法人オムスビ講演、振り返り

南相馬市の小高区で活動している一般財団法人オムスビの代表理事の森山さんからお話を伺った。森山さんは移住してきた方で学生と年齢が近く、斬新なアイデアで小高区の復興を支援しており、今までのツアーでの講演とはまた違った視点でお話を聞くことができた。森山さんの考え方は被災地に限らず、これからの日本の地域づくりに必要な考え方で多くのことを学ぶことができた。



森山さん講演



振り返り

### 【感想】

オムスビの森山さんのお話は復興をゲームに例えていてすごくわかりやすい講演でした。それに比べて自分は頭が固く、見習わなければならないと思いました。今まで話を聞いてきた人たちとは視点が違い、いい刺激になりました。

震災から 8 年半が経つが、まだ復興していないところがとても多いという印象を皆が持つということがわかりました。お金があってもやる人がいないということが今の課題なのだとわかりました。

OdakaMicroStandBar では色々な得意なことを持った人が集まって活動をしているというわかりました。これを少しずつ地域の中で広げていく活動だということ学びました。今まで様々な語り部さんの話を聞いて、それぞれの考え方や信念があることも同時に思い出しました。

小高の方ではない方が客観的な視点で町を盛り上げようとしていて、お金の問題もあり、そう簡単に活動や取り組みが進められるわけではないのだなと思いました。何かをしようとする際には本当に様々な視点が必要だということがわかった。

今回のツアーで、被災地の現状を知ることが出来た上、街おこしの活動の具体的な内容について触れることが出来て良かった。また、地域によって復興のビジョンが違うことにも気づかされた。

## (7) 非常食朝食

非常食にはどのようなものがあるのか、どのようなものが非常食として適しているのかを考える機会とするため朝食は非常食を持参してもらった。カンパンやアルファ米などのいわゆる非常食を持参した学生は初めて食べるという学生も多く、意外に美味しいこと、種類も豊富であることを知ったようである。カップ麺を持参する学生も多かったが水やお湯が沸かせなかったらどうするのか考え、またカップ麺やお弁当が毎日続いたらどうかを実体験してもらった機会となった。

### 【感想】

私は非常食と聞いてカンパンやドライ食品を想像していましたが缶詰やお湯や水で戻すものもあり、非常食全てがパサパサしているわけではないのだと知りました。また様々な種類があり、組み合わせを考えれば飽きることなく食事ができると思います。防災としてどのような物が非常食になるのか、どうしたら飽きずに食事ができるのか考えるべきだと思います。

昨年も参加していたので、どのような非常食があるのか意識するようになっていました。缶の中に入っているパンやにぎらずにおにぎりになる物など様々なものがあると気付かされました。

非常食を初めて食べましたが、意外に美味しくて驚きました。皆が持って来たものを見て色々な種類があることも驚きました。少し時間がかかる点が不便だと思いました。

新鮮な野菜や温かいものが食べられないという状態が長期間続いたら精神的に辛いなど感じました。

非常食って何だろう？と考えるところから始まってスーパーに行って悩んだときに、意外とお湯が使えるものなら種類があるのだなと驚きました。たった2日間くらいだったのに弁当と非常食に飽きて手料理が食べたいと思ってしまったので、被災するということは当たり前のも出来なくて、そこでも心が疲れていくのだなと少しでも体感できたのでよかったです。

味噌汁を持って行ったのですが、お水が出なくなったら、温かいものも食べられなくなってしまうので、お水は大事だなと感じました。

お湯を使うものを持って行ったのですが、本当の災害の時にはお湯も使えない場合があるので、開けたらすぐに食べられるものの方が良いと思いました。しかし、そのようなものになると乾き物が多く、多量の水分が欲しくなると思うので、水対策も欠かせないと思いました。家でもお湯を使わない非常食を備えていくようにしようと思いました。

10 アンケート結果 回答数 30

Q 1. 1日目『The people』の講話、ボランティア活動について

満足 26 ・ やや満足 3 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 2. 2日目『広野わいわいプロジェクト』の講話、ボランティア活動について

満足 23 ・ やや満足 5 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 3. 2日目の富岡町視察

満足 24 ・ やや満足 5 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 4. 3日目の広野スタイルのボランティアについて

満足 29 ・ やや満足 1 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 5. 民泊について

満足 24 ・ やや満足 1 ・ 普通 2 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1 ・ 無回答 3

Q 6. 民泊での体験活動

満足 25 ・ やや満足 5 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 7. 4日目振り返り

満足 22 ・ やや満足 7 ・ 普通 1 ・ やや不満足 1 ・ 不満足 1

Q 9. 今回のツアーで一番印象に残ったものは何ですか？

- ・実際に津波があった場所に行ったこと
- ・富岡町視察（1 2）
- ・帰還困難区域の様子が昨年と変わっていなかったこと
- ・オムスビの講演
- ・復興事業の実情を知ることが出来たこと
- ・広野スタイル（2）
- ・広野わいわいプロジェクト
- ・旧広野幼稚園でのお話
- ・「茶の間」の内容について考えたこと
- ・古着の仕分け
- ・フレコンバッグ
- ・フレコンバッグが減っていた事
- ・民泊（5）
- ・ふたばいんふお（双葉郡総合インフォメーションセンター）
- ・「つながり」という言葉

### 全体を通しての感想

今回友人に誘われて参加しました。今回のボランティアで思ったことは以前は仲が良かった隣人の人とも口もきかない関係になってしまう「原発」というものは本当にひどいものだと思います。そしてメディアで取り上げられているものはごく一部のことで、本当は復興や復旧はまだまだの状態でした。民泊先で被災した方が実際に津波のあった場所に連れて行ってもらったことは心が痛くなりましたが、いい経験になりました。8年半経った被災地に行って自分のできないことがないかを探したときに、何もできないことがないように思えて、自分の無力さを強く感じました。私は地理学を専攻しているにも関わらず、今の時点で何も思いつかないのが恥ずかしい気持ちでいっぱいでした。今後はこれまで以上に勉学に励むべきだと強く感じました。さらに現地に行かなければわからないことが本当に沢山あるのだと思い、誘ってくれた友人に感謝したいと思います。このツアーを通して、自分の中で何か動かなければならないと思いました。将来、何等かの形で社会に貢献できるように頑張りたいです。そして悪いイメージの日本の福島から良いイメージの世界の福島になれるように常日頃から考えていきたいと思っています。(地球環境科学部 1年)

参加した理由は今までにボランティアをしたことがないということと、福島や原発に興味があったからです。ニュースや新聞などを通じて見る被災地とやはり異なる現場を目撃しました。特にフレコンバックが積まれている光景は異様でした。また一見して復興しているようなキレイな街でも人通りはほとんどなく、閑散としていて同じ日本とは思えませんでした。しかしながら、前に進もうと努力し活動している現地の方々を見るとこちらも勇気がわきました。これから日本の未来を生きる者として忘れてはならない福島の災害の現場を肌で感じることは本当に貴重な体験となりました。ぜひまた参加したいと思いました。(文学部 3年)

今回、福島県での被災地ボランティアツアーに参加して感じたことはひとくちに復興と言っても様々な形がそれぞれあるなということです。政府からすれば住民を全て仮設住宅から退去させて帰還困難区域の除染作業が終了して30年後までその地に大量のフレコンバックを置いておくことが復興なのかもしれませんが、広野町にとっては大人、子ども、作業員の方々全体が地域を盛り上げられる町になることが富岡町にとっては帰還困難区域を含めた町全体に人が戻ることや人に支えられる例ではなく、地域を支える例となること、南相馬市にとっては地域の補助金の格差に対しての確執や原発の恩恵を受けてきた人への思いを克服することなど地域によって様々に復興のあり方があると思います。福島の問題としてとらえるには早急で、メディアの取り上げない精神的な問題やまたそうしたメディアの取り上げる崩壊した建物や仮設住宅に住む人々のイメージにとらわれず、地域一つずつの復興の集合体こそが全体の復興へつながるのではないかと考えました。(心理学部 2年)